

重 鐫

日本歳時記

春





日本歲時記敘

伊耆氏命羲和欽若界天曆象日月星辰敬授人時其欽敬如此其故何也蓋聖人推測天道治曆明時是事天治民之事而治之法也天下之變莫先於此莫大於此堯之初政未及他事而先之者良有以也振古以來言曆象者世有其人屢改寢精靡有差貸唯如授時勤

武州河越藩  
御書物奉行  
岡村弋郎藏



民曆家之所未言也。如夏小正月令可謂庶幾乎。若夫玉燭靈典月令廣義諸書亦庶乎爲授民教時之一助。然其所載不純粹者亦夥矣。可謂博而雜也。本邦自古未聞言歲時之明且詳者。故民間往往失其故實而錯傳妖妄之說者居多。識者憾焉。竊謂教民授時在其位謀其政者之責而非吾曹之所宜議。

然如民生日用雜細更宜雖微賤復可言。豈爲僭上乎。不佞夙有志于此。然衰朽之餘齡。豈艱考索。嘗屬家姪好古命編錄於事之覈實而便乎民用者。書之以和字。家姪頗聰慧。有編削之才。彼之及古訂今。闕其疑。慎言其餘者。恆我之素志。書稿屢換而輯錄已具。於是乎子暇日逐條再修補之。書遂成編矣。第恨











ふたさんたるもいふ後乃らむじ人又物なり  
ふしとむとやけぬ事しるる事

貞享丁卯末夏日

筑州破出員原好古識

日本茶内記卷之一

損軒先生刪補

貝原好古編録

春

原書は春の意より春を春と云ふは他の物に比して見たり  
本條は春と云ふは春の意より春を春と云ふは他の物に比して見たり  
しよと云ふは春の意より春を春と云ふは他の物に比して見たり  
んつと云ふは春の意より春を春と云ふは他の物に比して見たり  
日のつと云ふは春の意より春を春と云ふは他の物に比して見たり  
あまのつと云ふは春の意より春を春と云ふは他の物に比して見たり  
ケルと云ふは春の意より春を春と云ふは他の物に比して見たり  
あまのつと云ふは春の意より春を春と云ふは他の物に比して見たり

春の初乃らむじ人の終一年は  
計を春と云ふは春の意より春を春と云ふは他の物に比して見たり  
事書と云ふは春の意より春を春と云ふは他の物に比して見たり



と初め勅び一修くして定一を時と共す  
 有らん又其の湯の初めく致され何ぞや天邊一  
 流て地とうへばらみとの教すくと禁ひ一  
 意固よやく甚之月乞と致されよ天地便よす  
 可相以て常おれ外子く起るよ廣くお一發と  
 被る形と修りて志とせし一せし一教す  
 しくなり進貴志く得たりなりい一進甚き事  
 無すなり取お一て寄せし乃遠なり乞よ進よと共  
 肝とたも一夏を愛とるん  
 送れ殿よいらく甚月致れ乃何園林を空を教乃

所よ進歩一して滞滞とのく生れと育す一  
 ス一の元せし一と爾等と共すなり一は又然  
 しては事一あり  
 金匠兼照よしく甚肝乃胆なり何少く死を  
 肝の膽よ入る余余の肝とくくありと心魂  
 とや母しなりとありとあり  
 千金方おしく甚七中一日  
 飲多しとく甘味とす一脾胃と共す一  
 月令廣義一しく甚肝乃胆なり何少く死を  
 飲食一しく次何と甚と食一とは氣と流す一



酒は一斗久しく飲又熱油と云ふ衣依とわ  
すくもろくくと熱すべし

春乃万毎朝飲く様うく一二百杯

又秋抄の時よりして熱湯と後一

探入膝乃下及足と使く砂とく一風毒脚

そよとのうくとあし

新書農書よしくも春乃万新書とくすよ改と念

事なれりの中よ熱あし人と書ふ

月令慶教よしく春の万大熱の物と念事一し

小蒜及てはまのん芽と念くべし

正月

正月の事正月の中○備後大分新書曰  
正月の事正月の中○備後大分新書曰  
正月の事正月の中○備後大分新書曰  
正月の事正月の中○備後大分新書曰

元日舞典のそく月元日舞典干支紀

正月也元日ハ初日也と記す

元日乃名あり又此日と云え

数心正らえしんえり案の元日ハ元日ハ元日ハ

と云やしり一玉燭宗典よと云り今乃世

と云と物して元と後と後漢代紀宣う物小

案乃始月の始日ハ始と云と始中の











乃又手洗すかへ

ふりし〜 紫し〜 寝よう人お打所人契

海糸半等葉花葉すりぬ花菊い〜

えりよ〜 あめか〜 雨り〜 延長〜 ち〜 ぬ〜

去れ〜 紀〜 ち〜 ぬ〜 ぬ〜

若く〜 葉〜 念〜 信〜 くれ〜 ぬ〜 有〜 誰〜 若〜

し我 國の風信〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜

他〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜

と〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜

元日〜 膝〜 牙〜 傷〜 と〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜

と〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜

と〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜

後〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜

付〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜

と〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜

つ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜

種〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜

に〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜

此〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜







あつえゆり

○今朝夜よき晴ざり何と人さそとちつと報と夫  
三命取の圖像にわねく松を別て紙よりたり  
と折紙て人門戸とたけ取く乞と賣の福報  
そのころ冥者多し故歌よりよきなり也

○しつめ水さくこのじりあり世後回春のいんく  
あつちまおいらりし十二月の立用は家へ水  
羽生鳥の方の井と封じて人は海せり立止の  
日代止よ去瓶小入く女あつつきくもほるもの  
立止の日若水と飲々年中の移字と深くいん

かゆ事とまあるてわさく山をひり井死水と  
てくろり多とのじりもゆりしやまはん  
次よくあは若水といふをねし

○又歯固といひてしらぬかみよびりか  
あは後髪と櫛す櫛すは強天の針髪大巻之十七條字は  
乃細いよりく髪杉櫛成形は港へ竹櫛の櫛髪を櫛す  
戦國にんといふはさるうみと他人を歯といひて  
怪解の類鏡代形はゆり月をさる  
命とこころあは歯といふ文字とよみひるひじ也  
歯固はらひとこびりさるありさる二月の  
かこよびり河をた今集へ入る  
わかむわかろりさるあれがひし





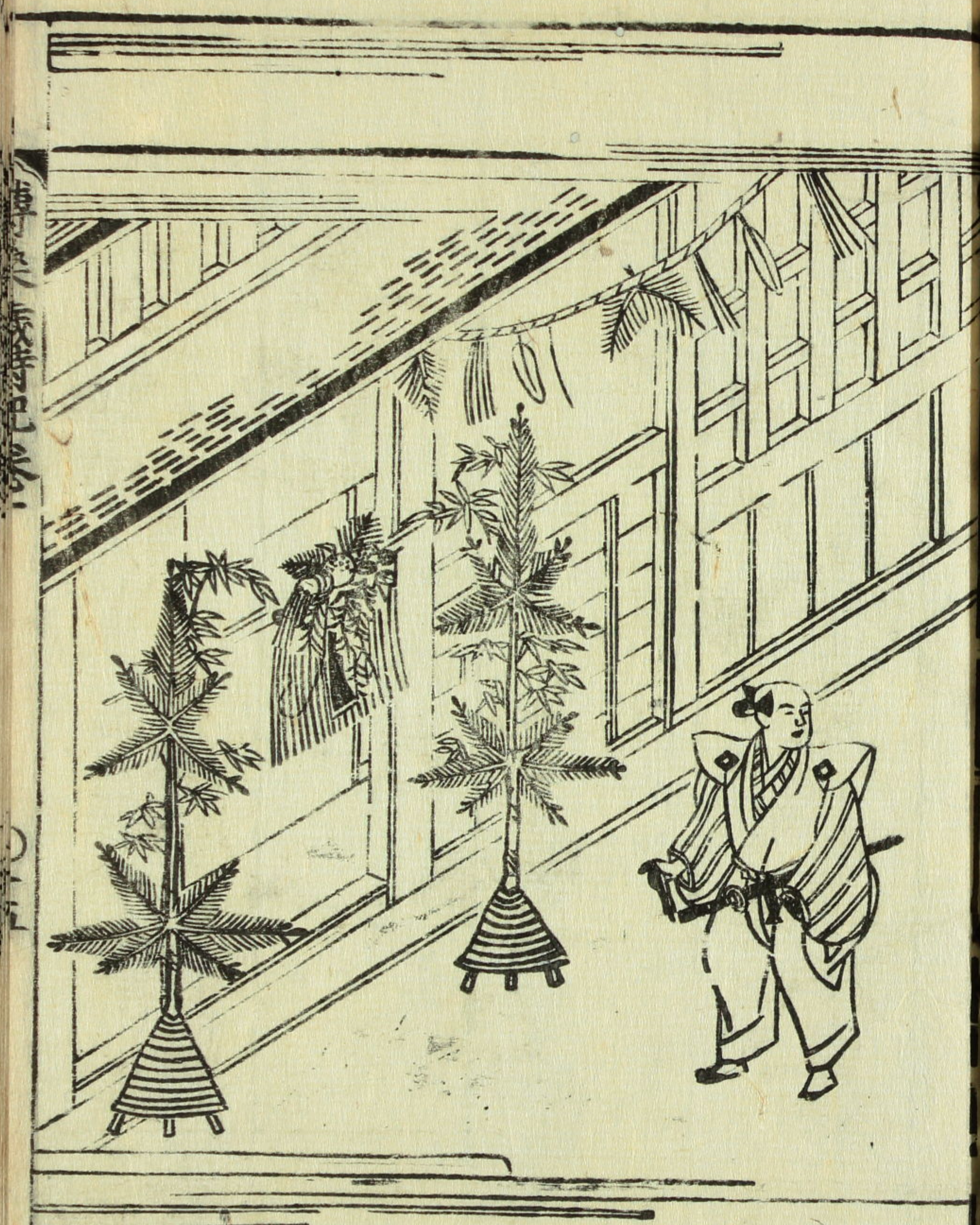












梅桑原用言卷一

七























春の世よとくふ氷れ雪りこくにうらむる雪や  
 ら海のうらむれ 新古今集よ梅政大政大臣  
 みゆい雪をこころにまて白雲のありけり  
 けし小春のよふたり 同集より 儂成  
 きみこころをこころにまてゆきと都よ  
 のこころをひびくか

曹松りままの詩よ

玉燭傳佳節 湯和魚出辰 土牛呈菜糝 徐蕊  
 表年春 臘去星回次 正月建寅 梅紀標  
 柳長梅思翅 柳人

英王林りま春の詩よ

五十年剛抵白溝 後宋歲月更茫然 余生幾  
 度看新曆 又被雪風滅 一年

張翥新りま春の詩よ

徘徊凝眺 冰霜少 春到人間 草木知 俊骨眼  
 生 意淡 东风吹 冰绿 卷

○ままの海より 紫雲集より けしこころをひびく  
 たしとるん 英翁のまえをひびく 人のこころをひびく  
 其の仲より けしこころをひびく 都よ



ひと多し〜て園ありと樹ありはありあり  
かえされどもその勢衰へ〜樹よ〜るまて  
た〜しやまは杜松も又多〜してあ〜る  
あ〜〜は地勢乃かんれつある勢へ〜

○年八始よ勢衰の破魔弓と〜射るは治す  
世を〜と忘れざるさある〜世む〜冬  
射礼と〜正月は内裏あ〜る射る事乃たり  
〜あり孝徳天皇此所宮は内〜正月は  
ろと〜む〜事古〜久も〜見〜り  
かほ〜と〜し〜り〜六年乃た〜

年也〜人〜と射〜り〜や〜就通考  
日本乃部也毎正月一日は射礼を記す  
○又球杖〜る〜あり是密尤〜眼と〜角と  
と〜後には〜た〜の教礼と〜侍り〜

影照神中杖十云十管線黃帝取密尤  
球之今球杖是也〜被例漢王年始用件  
國中世凶事仍日本國學其例年始打  
球杖云云〜事〜た〜る〜す且古〜又也  
是〜決附會の儀あり〜  
○又〜る〜乃わ〜れ〜たの〜して樂



義子よ娘とつまき板とてけくするあり世後四巻  
 おどくは地つれさとの蚊とくつれぬき  
 ありひるりるり秋乃らしめお燦輝とつら虫も来  
 へん蚊とつらまきお抱みりあはれこころの薬華  
 みをよとと人さうやらあして抱とつけり  
 これと板はつらあぶまの落る肉と人さうか  
 へんやうぬはく蚊とおこまうつらぬぬぬ  
 こころのこころはさほつらぬぬ  
 ○又お舞美業しつら舞正月はわらびうさ  
 正月はあま月乃比お舞は踊歌とくあ中の

男女をうり記とつてへて肉表みく後例とつて  
 てまのせつとつてあり  
中篇うり記の代り正月はあま月乃比  
お舞美業しつら舞正月はわらびうさ  
お舞美業しつら舞正月はわらびうさ  
 持統天皇の御時を漢人踊歌と奏せり  
 とうりお源氏乃御後れかうのうらさるああり  
 さ海もかたあうられ事ろろい梅風とあはれ  
 事よとつらつら子舞美業乃後例とつてい  
 侍りたり臨年乃舞人美春樂と奏せり  
 ありお舞美業とつら舞いあり  
世後四巻の  
みえり  
 お舞美業乃始り美業樂とつてあはれ  
 てうらひ舞わうらあありあありああり



























舟をてあしハ志纏り候へば乃々至義なる事ハ神  
 宗之くもく候へばと云ふ事ハ幸ハ纏と云ふ  
 なりてあしハなる事ハ神宗之くもく候へば  
 少く成士此風ハあしぬきハ候へばと云ふ事ハ  
 元風候へばと云ふ事ハあしぬきハ候へばと云ふ事ハ  
 日此事ハ一ハ礼義ハ事ハあしぬきハ候へばと云ふ事ハ  
 へり候へ

日本歳時記卷之二

正月之下

正月之下

十四日門松燈籠と云ふ今日見奉れ候へば大守の繩と  
 扱人おつと云ふ候へばと云ふ事ハ引る事ハ引る事ハ  
 引ると云ふ事ハ引る事ハ引る事ハ引る事ハ引る事ハ

扱守り候へば歳時記の如く立春日施釣之候へば  
 籠籠相胃綿巨敷里鳴鼓津之按ハ輪子遊登  
 為載舟之候退別釣之進則強之名曰釣落逆  
 釣為敷起此ハ此繩ハと云ふ事ハ引る事ハ引る事ハ  
 ○と云ふ事ハ引る事ハ引る事ハ引る事ハ引る事ハ







つたおろくやけの火災、變あり爆竹の火より  
回祿が事、つらみの凶年、も多し、寺れの家、  
不又ハ宅をくハ電ハ下ハ燒ハ一風勢なり、  
つたハ燒も又可なり

爆竹ハ作をたて  
つらつらなり

我國ハ今日爆竹すく、元夜流る、  
より初より、事、  
一爆竹すまハ、  
内紀ハ、  
王都ハ、  
上ハハ漢ハ武帝ハ、

おれわくろすまで、  
焼のり、  
開元、  
あつまり、  
爆竹、  
といは、  
とた、  
道安の書、



左義也云又西城義也や東也云とらや  
 多部乃候と爆竹と西城伴法は義もこりて東也へ  
 勢も先よすなり  
 海布すしとすなりなりとすしとすし海門入り  
 とすの事なまは我道と卷らるるなり  
 ちんばとすなり乃我を授とすなり又法湯  
 家れ我も玉且持来と個休の感也なり  
 三笠杖焼奇舎ハ三義退治れしなり  
 夢明の蓋蓋内他よりなれとこと又義廻り  
 後りまは蓋位すなりなりなりなりなり  
 博和元日なる小爆竹とすなりなりなりなり

我國の今自すなりなりなりなりなり  
 乃和氣とすなりなりなりなりなり  
 十二月廿二日爆竹とすなりなりなりなり  
 乃是ハあけのつ爆竹元日なりなりなりなり  
 ありなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
 と受敷一敷字と考なりなりなりなりなり  
 ことく西方便中有人也尺律礼人則忘  
 藝名曰山藤人乃竹若大甲輝外有也  
 懐又朱子後朝も教人乃なりなりなりなり  
 事のあり死して厚くなりなりなりなりなり



かみすびん乃て是より御小候とてさるるに  
くれとてせられ給食共くお所治治人  
ありく爆杖と致くられ所依の樹を焚き  
しん遂に致くや世朱子乃てく是他相死  
氣未敷杖爆杖警敷了又焦氏智業より  
後中集を引ていづく爆作妖氣と殊事佐死  
に人部人の仲變といふものありて鬼乃て  
崇とたされて戸備と用くさるるに鬼  
とてりよ瓦を投く妨とて決變巫變と  
取くこれといのりたれは知く爆杖とてい

いみじくはうんちり致されし御小候とて日々  
中より方々く爆杖とてく爆作すはるるに  
半一せよ變るはちと致くて爆作とて  
致すはるるに妖氣乃事やとて  
ちこのの爆杖とてく是より爆作の爆杖と  
致くはるるに妖氣乃事やとて

○今初山皇朝と致して健とす一てこれと今  
海の内々の枕をよみ十日かりらるるに  
ふしかけしは事なり家系のはり初  
とる又七種れ致といふは未業春と稱は





梅子竹園詩卷三

五



胡麻子小豆也と延壽式より云ふなり又九條に有る  
 おれ記のハ白穀まめあつと粟粟柿さけを  
 かりしと云り世り正月一枕黄粥防風粥粟米粥  
 をしと云くを人より云く一と云い少事 十全月  
 今よこえたり

世風記より正月十五日小豆粥と考へく天狗粥と  
 かりし庭中又粟と懸る杖（粥と云ふ人  
 その粥凝りた赤ふじりひ再なる粥して乞  
 と娘と云ふ夜をなすといふい外後奇信  
 祀制叙叔の吳苑をといふと海く乃記の是と云れ

妖言代記に一と信ずるにたりす又婦之真  
 一正月十日膏粥とばかりたりと云ふ  
 と云り又又煎菜粥記を正月十日と云  
 糜と云くうて油膏と云うの二入と云ふ  
 中つと云ふえり月令ふと云ふと云ふ  
 云といふ子侍はと云ふ人授はと云ふ

○今日御志考姓乃靈節よと云ふと云ふ新果  
 と云ふと云ふ一毎月や日と云ふと云ふ  
 と云ふと云ふ一と云ふと云ふと云ふと云ふ  
 ○枕草子より云く十日ふかぬ乃木記に記す







やうんふんのもて文思そのお月様下てん  
あやういふくは

○今秋の一年十二夜乃圓月れ始まりあま  
ん何くん人をと習代貝紙現ゆいし事わ  
東波の妻より友人は海をみくまおれ月と  
ててあうび春月良味め秋月色好月色  
令人懐懐喜應色令人和悦といひし事  
題酒麟の候紙梅よんてりお裁集し上  
門流る

花のつるよひるをゆりよまの夜のつるの  
月をんくくきり 新古今集よたに千里

てりもせひのりもてきまは夜のおやろ  
月夜ふきくものろあま

○今夕更ぬ乃交とら事ととれ之勢命と撥  
すし勝会度教よんてり

十六日 國信は日遊樂と事とす

お報知よ新魯の人多く正月十六日とて  
奇観ふあそふこれと走夜宿といふとゆめ  
るんていもい日遊樂とらあやうい

○又今日 結怨おく人奴婢ハ宿居 後よあやうい



さく主人の一日の満と乞て家と成り父母兄弟  
親戚の福す

梅と多よ新穀新化小執金吾ハ年中乃志の  
おしと禁ずり幸と國り成あり唯正月十  
五六朝志く赤後者一日禁とゆるくらこれ  
と放夜といてゆるせしみの舞おしかれ  
幸しゆるしと見えたり

廿日今日女人乃鏡着の祓とてうまに儀ありし  
後鏡と養念ふ事ありこれ我に此鏡の儀と  
いたふと此一子事あり丹がとをくらゆるを  
たうといひて初祓祓と御やけいふゆふに  
と後よとさる一儀よつひなるの女

臘月沐浴

○凡貴家入功ふ一ふ事ハ時家内室中  
とまといくを掃除するりゆきありしは毎  
月日に家内室中を掃く掃除せぬれど  
正月月中掃除とゆふたすくして入功と  
くれんごしお清るなりとて毎月時  
乃は午として文中と掃除せしむる  
遊藝式小見たり



○新楚案所記小元日一二月晦ハ元日と云ふ  
勝ハ他々飛つク飲食次第舟と云ハ水  
小のうんで富樂寸毎月之肌強ク味非何  
正月之初年开らるる今ハ世民取ふと年始ハ親  
以ハ親と云ハ今ハ世民取ふと年始ハ親  
戚富樂寸と云ハ今ハ世民取ふと年始ハ親  
ハ月世人切やく親戚と富樂寸  
唐ハ世民取ふと年始ハ親  
戚ハ世民取ふと年始ハ親  
ハ月世人切やく親戚と富樂寸  
唐ハ世民取ふと年始ハ親  
戚ハ世民取ふと年始ハ親

ハ月世人切やく親戚と富樂寸  
唐ハ世民取ふと年始ハ親  
戚ハ世民取ふと年始ハ親  
ハ月世人切やく親戚と富樂寸  
唐ハ世民取ふと年始ハ親  
戚ハ世民取ふと年始ハ親  
ハ月世人切やく親戚と富樂寸  
唐ハ世民取ふと年始ハ親  
戚ハ世民取ふと年始ハ親  
ハ月世人切やく親戚と富樂寸  
唐ハ世民取ふと年始ハ親  
戚ハ世民取ふと年始ハ親

漢書卷之九

〇十一















おのつに理よおのく審まうれくし一 船も能  
 具とそくを神位と後くかへ天太子にわす  
 去く日月とあふ事いおく 今道程有り  
 元始終れまことなる人か種まくして世の  
 初ありといへや大徳日月と遊戯の家よあ  
 とや我日月と久しき事人よかろふ事福  
 おほことありそ身くみ縁と 保ちりそのも  
 天邊神明の知りや事なきんかめと此と  
 一強まの何く 去るれまことと借  
 の我りまありなきんかめと此と

の道程をうくしやとうれはし じい事あつ  
 又偽如命世紀の種まうけく神よつう道  
 と法くよとくしあいつく佛位入息とまう事  
 一神明と五あしまれとくされの神の海  
 偽法と三経よりああよじうし一 信機本  
 邪言の肉の二下こそ小僧尼のよとくれま  
 とゆりされすまのよとあへん 延表式は勢音文  
 の三烟と佛と中よといひ経と後紙といひ塔と  
 あくといひ寺と尾ぶといひ信と髪と  
 といひ尼と髪とと云蘇と片膳といひこれと肉



















世小久し一息が傳えあそりけりも終つた  
 色棚守り志有り作さば磨速史より征伐  
 年中経通とよその料率小意せしり及  
 廿ふり事と取し清く綴てあそり征これ  
 くれと袍帯を揃りて葬しせしぬ内室  
 或年乃二月元日の夜此葬しひん乃不鬼  
 り、虚耗し物して玉首とぬとむ時一  
 て小鬼とそくてこんとあそり明皇  
 二とらりつと四はくが辨く  
 経旭をりつと列せし時袍帯乃葬しと

編くもつ紙意の世世と報せん  
 耗乃忠と深くとりんほひて身  
 若遠生より命とりつ代徳と圖  
 清くしらまうしあそりあそり  
 あそりあそり経通張次謝賜  
 たりあそり流よび事ありと久し  
 拙志よびあそり経旭唐乃明皇  
 けしあそりあそり物ありあそり  
 也降邪干劾之ハ経葵宋代  
 経葵たが葵と旭と葵同して







何くそひ難し逆とまむび理明らるるべし力  
けりしうた志氣とまらる

日月樹木と稲穀へー西日と本とゆり上り

を古妻よ刀をさり枝と切く地を挿し此月

やー又新茶と稲穀の色け月を布し

廣義よ思へりしはるる稲穀を刀とぬく

新活らるるや老政全書よゆり、元徳若木

と植るふ下弦の後上弦の末す

八月と陸軍八月の陸軍をさるし

氣堂より樹木の生長全く枝葉よけり

樹のまを樹とやぶる樹木とれべし

又ゆり元果本とゆりゆり子先九月乃中後

樹のまゆりと樹く繩とゆりまゆりとかりをり

ゆりまゆり六肥土と入水と渡へー次年西二月

ゆりゆりゆりゆり稲穀の肉とゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

日月柳の枝と切く地を挿し此月

義よ刀をさり元日月枝と挿て可







歌陽云 種花待

激源江口室和間之後仍復次弟載我欲成  
橋浦 其數一日不花開

楊梅齋云 三之種ハ待

三運初開是將卿再開三運首剛明海有  
之運一運花非一運

趙孟頫云 載仁杏竹

白髮梅根送遠運何年及見子垂老本他  
添培植何底花結子時

四月を教生れ初あり 亦よ本とらんり かの魚をい

果とらんり かの魚をい

むすれらんり かの魚をい

い事 腹合よらんり かの魚をい

禽然以時教言孔子乃曰 樹教一載 不以其

時也 孝也らんり かの魚をい

とふ時とらんり かの魚をい

天能らんり かの魚をい

動 雲深よらんり かの魚をい

亦不固密して 志動と 洩らんり かの魚をい

此月狸肉とらんり かの魚をい



生蕙と々人の面よ遊風と翠の又梨と々  
しるりれ又暫花不対北地と落して非  
乃動と遊く  
月令廣義 暮書

凡一年の七十二候あり六月と一候  
氣こく七候と一月と七十三候と一年とす  
四月より十二月まで毎月各六候とす  
四月乃六候中一东风強凍才之盛  
三魚上冰右立雪乃三候あり中  
又冰厚小中云云本崩動たる氷乃三候あり  
凡一日一候漏刻の較とて百刻百刻ハ漏水の

肉よ魚より案よよまき死乃較あり  
長に走るるがて孕氷乃長短ひ  
孕氷がさす時を較す  
一ノ一有二十四刻孕氷たぐひよ長短ひ  
先立雪ハ五十四刻孕氷乃長短と  
十分合百刻あり  
取あ十四刻十分あり凡六十分と一  
刻と

月令廣義  
よみ



